

# 結婚の神様

櫛木理宇

最終回

3

その披露宴は、一見まともであった。

新郎は多少浮かない顔をしていたものの、新婦は幸せそうな笑みをたたえていた。ドレスの趣味も、お色直しの回数も常識の範囲内だった。

咲希<sup>さき</sup>たちサクラが任されたスピーチは、あらかじめ用意された原稿をマイクの前で読みあげるだけだった。余興も指定があり、そのとおりにこなせばよかった。

楽でなによりだ。そう、ただ一つの奇妙な点を除けば。

「……アサコちゃん、今日はほんとうにおめでとう。どうか末永くお幸せに」

ゆり<sup>ゆり</sup>か 百合香がスピーチ原稿を読みあげ、一礼する。会場から拍手が湧

く。彼らに合わせて手を叩きながら咲希は、

——確か新婦の名前は「ふみか文歌」よね。

なのになぜアサコちゃんと呼ばれているんだろう、と訝いふかしんでいた。

咲希に渡された原稿でもやはり、新婦を「アサコ」と呼ぶよう指定があった。渾名あだなにしては妙な呼称だ。おまけに新婦がアサコと呼ばれるたび、新郎の顔が引き攣つるのも気にかかる。

「まあ、一〇〇パーセント問題なしなら、サクラなんて頼みやしないか……」

唇くちびるから勝手に言葉が洩もれた。

隣席の女性と目が合い、はっとする。

慌てて咲希は顔をそむけた。主菜のステーキに添えられたエミリューションソースとやらをパンで拭ぬぐい、食事に集中しているふりをした。

——いけないいけない。横のこの女性は、この披露宴唯一の「本物の新婦御友人」なんだった。

それにしてもスピーチも余興も頼まれていないのが謎だが、不用意にぼやいていい相手でないのは確かである。

気まづさをこまかそうと、ワインを呷あおった。

だが、いまだ横から視線を感じる。

ああもう、まずいこと言っちゃったな、と咲希は悔やんだ。いろいろ気になることがありすぎるせいで、頭も口も捻ねじ子がゆるくなっているようだ。

どうかこのまま聞き流してくれますように——と咲希が祈っていると、

「あろう」

と隣席の女性が声を発した。

「……ひよっとして、サクラなんですか？ 文歌のお友達にしては見たことないんだ、ってずっと思ってたんですけど……」

どうやら祈りはむなしかつたらしい。咲希の額を、ひとすじの汗が垂れ落ちた。

さてここはどうはぐらかせばいいだろう。嘘は苦手だ。というか下手くそだ。せめて百合香がいてくれたならまだしも、自分一人で疑いをそらせるとは思えない。

「え、いえ、あの、えーと」

ひたすら狼狽ろうばいする咲希に、

「いいんです。ごまかさなくて」と女性がほろ苦く笑った。

「無理ありません。事情を知っている子は、みんな気味悪がって出席を断ったんですもん。どうしても断りきれなかったのは、幼馴おきな

染じみのわたしだけ」

「気味悪……つて」

つい応じてしまい、咲希は口を掌てのらで覆った。

女性がふたたび苦笑する。

「ほんとにいいんですよ。わたし、誰にも言いふらしたりしません。それができるくらいなら、今日この場には来ていませんもの」

「いや、あの……すみません」

咲希はうつむいた。

女性はワインをグラスの中で転がして、

「——あさこ亜紗子ちゃんは、文歌が高校二年のときの同級生なんです」と言った。

「すごくきれいな子で、地元発行の雑誌中心にモデル活動をしてました。そりや一流芸能人ほどじゃないですけど、タレントの養成学校にだって通ってたし、わたしたちの中じや段違いの美少女でした。

文歌は、亜紗子ちゃんに夢中で」

気が付けば、なんでも亜紗子ちゃんの真似っこをするようになっていました——と、彼女は低くつぶやいた。

「この披露宴もそうなんです。きっかり一年前の今日、亜紗子ちゃんはこの会館で式と披露宴を挙げました。そのときとドレスもBG Mもプランも、スピーチの中身も余興も、全部そっくり同じ。文歌流に言うなら、『なにもかも亜紗子ちゃんとお揃い』というやつです」

百合香がテーブルに戻ってきた。

隣席の女性と話している咲希をちらりと見、なにも言わずにウエーターが引いた椅子へと座る。

幼馴染みの女性がつづけた。

「ついでに言えばあの新郎は、亜紗子ちゃんの元彼です。このあと行くはずの新婚旅行の行き先も、亜紗子ちゃんのハネムーンと同じくイタリア。きっとお土産も、撮ってくる写真の構図まで同じにしてみせるんじゃないでしょうか」

新郎をはじめて紹介されたときは、さすがに驚きました——と彼女は言った。

「あの人、亜紗子ちゃんの元彼じゃない」と指摘すると、

「うんそう。亜紗子ちゃんのお古だから欲しかったの」  
しれっとして、新婦こと文歌は言いかえしてきたという。

「……文歌って、小学生の頃はずっとアイドルや芸能人の真似ばかりしてたんです。でも亜紗子ちゃんと知り合ってから、彼女にべったり執着するようになって」

彼女は眉宇を曇らせ、

「文歌は、自分のことが嫌いなんです」と言った。

「いつだってあの子は自分じゃない誰かになりたがってた。……そんな文歌を疎ましがってみんな離れて行って、残ったのはわたし一人」

と高砂たかさの新婦を見やり、寂しげに笑う。

「こんなことを言うとおの子は怒るでしょうけど、可哀想で見捨てられないんです。だってあの子がおかしくなったのは、小二のとき両親が離婚してからだから。文歌のおじいちゃんおばあちゃんも同じ気持ちみたいで、親のぶんまで愛してあげなきゃと、お金をじゃぶじゃぶ注いで甘やかしてました。だからこの式と披露宴の費用は、全部文歌のおじいちゃん持ち」

「それは——」

咲希は言いかけてやめ、なるべく穏健な言葉を選んで言った。

「そのやりかたは、果たして親のぶんまで愛した、と言えるんでしょうか。お金に不自由させないイコール愛情、ではないと思いますけれど」

「そうですね」

女はうなずいた。

「現に文歌はいま、幸せじゃないですもん。もし十分な愛情をもらって満ち足りていたら、あの子はオリジナルの自分をもっと肯定できていたんじゃないかしら」

咲希は相槌あいづちに困った。

女が苦笑する。

「——でもわたしには、なにもできないようです。いままでも、これからも」

幼馴染みの言葉とは裏腹に、新婦は高砂で幸福そのものの笑顔を振りまいていた。咲希はその笑みを複雑な思いで眺めた。

最後に司会から渡されたマイクを、新婦は両手で捧たもげ持つようにして言った。

「本日は御多忙の中を御出席くださりまして、まことにありがとうございます。ございました。彼もわたしも若輩者じやくはいものではございますが、末永くやっいていきますよう、今度とも御指導のほどよろしくお願いいたします。

——皆様、アサコは幸せになります！」

「そんな浮かない顔しないの」

呆あきれ顔で、百合香が咲希を覗きこむ。

「午後からは青扇殿せいおうでんでもう一仕事よ。はい営業スマイル。笑って笑って」

「わかってるよう」

唸うなるように応え、咲希は着替え一式の入ったバッグを肩へ掛けなおした。

秋が近づくにつれ透明さを増してきた空の下を、二人はポンプスのヒールを鳴らして歩いていった。

細い三又路さんさろを抜け、老舗しにせの和菓子屋の角を曲がる。五分ほど歩けば停留所に着くから、あとは青扇殿まで直通のバスに乗ればいいだけだ。

百合香が低く言った。

「確かにいまいち気分がよくない披露宴だったけどさ、あれも新婦の選んだ人生よ。……あたしはね、女に選択肢がある現代に生まれてよかったとつねづね思っているの。うちの母を見ると、とくにそう思う。たとえ不幸な結果に終わろうが、自分で自分の人生を好きにできるっていいことよね」

実感のこもった口調だった。

思わず咲希は、彼女の横顔を見つめかえした。

——そういえば以前、百合香は両親について軽くこぼしていたっけ。

確か離婚はしていないけれど、二十年近く家庭内別居中だとか言っていた。彼女のどこか達観したようなクールな性格は、その環境から生まれたものかもしれない。

「……百合香は、結婚制度そのものが、あんまり好きじゃないんだ？」

「そうね」



あっけらかんと百合香は認めた。

「制度そのものとは言わないまでも、婚姻届なんていう紙きれ一枚の関係に、過剰に縛りつけられるのはどうかと思ってるわ」

目の前で信号が青に変わった。

咲きはじめの薄黄木犀うすぎもくせいが、風によって香った。

#### 4

翌週の土曜。

青扇殿の披露宴会場『鳳凰の間』ほうおうに一步入って、咲希は思わず息を呑んだ。

受付にはファンシーなウエルカムベアが『翔斗・美佳』しょうと みかのカードを抱いて待ちかまえていた。しかし普通なのはそこまでであった。

「こんな光景、テレビで観たことあるわ。いわゆる『荒れる成人式』ってやつ」

百合香が無表情につぶやく。

彼女の言葉どおり、披露宴会場のいたるところをうろついているのは、金髪リーゼントにサングラス、そして脛すねまで丈のある特攻服をまとった男たちだった。

特攻服の背中には、それぞれ『夜露死苦』、『天上天下唯我独尊』、

『爆走守護神』、『喧嘩上等』などの刺繍ししゅうが入っていた。どれもサテン生地で、濃紫、ショッキングピンク、真紅と、眺めているだけで目がちかちかしてくる。

「……いつの時代からタイムスリップしてきたのかしら」

「体を張ったギャグにしか見えない……」

呆然ぼうぜんと立ちつくす咲希と百合香の脇には、同じく困惑顔のスーツの一人が立っていた。どうやら彼らも招待客らしい。席に着いているものかどうかとまごついている。

スーツの男性のうちの一人が、咲希の肩へ軽くぶつかかった。

「これは失敬。申し訳——」

謝罪の言葉が途中で消える。男性とまともに目が合い、咲希はあやうく悲鳴をあげかけた。

——シロちゃん家のおじさん。

未来の義父、いや今居史郎いまいしろうの父こと今居小次郎氏こじろうだ。息子とは正反対に小太りの体型で、眼鏡の奥の目は柔和そうに光っている。

「お、おじさん、どうして」

うろたえる咲希に、小次郎が掌で額を撫なでた。

「どうしてって、新婦の後藤さんはうちの課の新人さんだからさ。まさか咲希ちゃんも、この披露宴に？」

「ええ。ご、後藤さんとは、社会人サークルの仲間で」

新人ならば同い年ではなさそうだと、咄嗟とっさにそうごまかした。

疑う様子もなく小次郎は眉を下げて、

「そうかそうか。まさか咲希ちゃんと彼女が友達だったとはなあ。

世間は狭いな」

と何度もうなずいた。

「しかしこの会場の客層——いや、雰囲気にはびつくりしたよ。後藤さんはしっかりした家柄のお嬢さんのはずなんだが、どうしちゃったんだろうな」

「わ、わたしもびつくりです。美佳ちゃんの彼氏と会うのははじめで、まさかお友達がこんなだとは」

咲希も早口で同意した。まさか自分の男の好みまで、新婦と類友だと思われてはたまらない。

特攻服の若者たちはくわえ煙草たばこで、動物園の熊よろしく会場をそのそ歩きまわっている。その隙間を縫せうようにして忙せわしく動きまわっている女がいた。醍醐だいごリカだ。

——また、彼女が担当する披露宴なのね。

咲希はさらにげんなりした。

きつと無事には終わるまいと、いまのうちから覚悟を決める。ちよつとやそつとのハプニングでは動じぬよう、肚はらをくくっておかねばなるまい。

「たいへんお待たせいたしました。新郎新婦の御入場です——」

司会の声に合わせて、最後方の入場口がひらく。

慎ましやかに微笑む新婦は、一見まともであった。オフショルダ―でドーム型スカートのウェディングドレス。式の際はアップに結っていたのだろう髪は、いまはダウンスタイルにゆるくまとめられている。

しかし新郎は、招待客らと同じく特攻服にサングラスといういでたちであった。右胸には『一生一度の花道、これが俺の男道』、そして左裾には『我命続限美佳愛永遠』との刺繍が明朝体で入っていた。

新郎友人席から、拍手と口笛、「いいぞ、翔ちゃん!」、「日本一!」と歓声があがる。

新婦側の来賓の顔は対照的に、一様に引き攣っていた。

主賓の挨拶は新郎の上司や親族ではなく、かつて彼が所属していた暴走族『極楽蝶』の初代リーダーだという男がマイクの前へ立った。

「えー、翔斗のやつは一本スジの通った、超ビツとした男っすよ。そいつはこのおれが保証しますよ」

ライダーズジャケットにジーンズ、レイバンのサングラス。指には髑髏のごついシルヴァーリングが輝くというある意味百点満点のスタイルで、彼は『極楽蝶』と新郎たちが織りなしてきた暴走の歴

史を熱く語った。

新郎ならびに仲間たちは、それを神妙な面持ちで傾聴した。新婦はそんな新郎の横顔を、ひたすらうっとり見つめていた。

常にも増して真剣に咲希は思った。帰りたい——と。

「乾杯！」

そう主賓が叫んだときには、会場の約半分やけに自棄気味の空気が満ちていた。

百合香はもちろん、咲希も手の中の杯を一気に呷った。新郎友人席ではすでに、

「二杯目、二杯目！」

「ンだよ、このシヨンベンみてえな酒！ 焼酎しようちゆうねえのかよ！」  
の声が湧いていた。

座はまたたく間に乱れはじめた。

特攻服の一団は皆、浴びるように飲んだ。ウェイターからビールやシャンパンの瓶を奪って振りまわす者、脱ぎだす者、テーブルの上に乗って踊りだす者と、披露宴というよりは場末の居酒屋かカラオケボックスの様相を呈してきた。

来賓のスピーチは彼らの銅鑼声どらごえにかき消され、司会の声すらろくに聞こえない有様だった。

新婦のお色直しはなく、たてつづけに新郎友人による余興——と

いう名目の馬鹿騒ぎがつづいた。

しまいに彼らは全裸で横一列に並ぶと、長渕剛の『友よ』を合唱しはじめた。

肩を組み、涙ながらに友情ソングを歌う全裸の一群から目をそらしながら、

——こりや新婦の友人が出席したがないわけだわ。

と咲希はしみじみ感じ入った。

まだ三十代後半とおぼしき新郎両親は、どうやら息子と同じ文化圏に属しているらしい。父親は金髪にダブルのスーツ。母親は豹柄のドレスに網タイツで、余興にやんやの声援を送っている。

かたや新婦両親は、お通夜のごとき沈痛な表情でうつむいて微動だにしない。

「これはもう飲むしかないわね」と百合香。

「だね、飲もう飲もう」

咲希も首肯した。アルコールの力を借りて、二人は現実逃避への道を選んだ。会場のあちこちから皿やグラスの割れる音、短い悲鳴が聞こえてくる。

百合香が顔見知りのウェイターを三人ほど呼んで「ごめんなさい、ちよつと……」と可愛らしく掌を合わせた。そして衝立のごとく立ちほだかつてもらい、卑猥な言葉をかけてくる酔っぱらいの群れを

遮断<sup>しゃだん</sup>した。

その後、咲希はひたすら酒と食事に没頭した。だが途中で、喧騒<sup>けんそう</sup>の調子が変わってきた様子に気づいた。

首を伸ばして高砂を見やる。

新郎新婦が、なにやら醍醐リカに食ってかかっていた。新婦が顔をくしゃくしゃにして泣いている。新郎はリカの胸倉を掴まんばかりだ。

「あの、すみません、ちょっと行ってきます」

ウェイターのうち二人が、急いで高砂へ駆けつけていった。

「どうしたの、なにかあったの？」

残ったウェイターに咲希が尋ねる。彼は心配そうに仲間の背を見送りながら、

「たぶんですが、サプライズが失敗してしまったのではないかと

……」

「サプライズ？」

「はい。醍醐さんと新婦の企画で、サクラじゃない本当の友達を

——あ、すみません」

どうやら百合香と咲希の正体を知っているらしい彼は口ごもり、

「その、新婦の御友人の方がたが途中で歌いながら入ってきて、新郎新婦を祝うっていうフラッシュモブのサプライズが予定されてた

んです。でも、残念ながら……お友達にですね、全員お断りされたみたいで」

「ああ……」

さもありなん、と咲希はうなずいた。それにしても、新婦本人が企画した『新婦へのサプライズ』とは恐れ入る。

遠目に見守っていたが、新郎新婦がおさまる様子はなかった。

むしろ新郎はヒートアップする一方だ。割って入ったウェイターがリカを逃がし、代わりに新郎に掴みかかられている。

暴れていた酔漢たちも、さすがに高砂の異様さに気づいたらしい。数人が新郎の加勢に走った。慌ててウェイターやスタッフも走り寄る。咲希たちの横にいたウェイターも「すみません」と言い残して駆けていった。

新婦の親戚らしき中年男性が、新郎を指さして怒鳴っている。おそらくは「やめなさい」とでも言っているのだろうが、遠すぎて声は聞こえない。

酔漢の一人が、中年男性の胸を押した。

男性がよろけ、テーブルに倒れかかった。怒号と絶叫が湧いた。数人が男性に殺到し、蹴りつけはじめた。

史郎の父が立ちあがるのが見えた。

咲希ははっと腰を浮かせた。



椅子を蹴って彼女は駆けつけようとした。だが、遅かった。小次郎になにごとか注意された酔っぱらいは、ためらわず彼を殴った。小次郎が倒れる。その腹に蹴りが入った。咲希は悲鳴を放った。

5

「ごめんね、ほんとうにごめんね」

お見舞いの花束を抱え、総合病院のエレベータ前で何度も頭を下げる咲希に、

「べつにおまえは悪くないだろう。ただその場に居合わせたってだけで」

と史郎が呆れ顔で言った。

彼らの横を、同じく見舞い客らしい親子連れが通り過ぎていく。

日曜日の総合病院は想像以上に賑やかだった。売店のレジには行列が出来、ガラス張りの喫煙ルームは患者も客も入り乱れての鮪詰すしづめめだ。

「でもわたしがのんきに眺めてたから。もっと早く間に入っていれば」

「そうしたら怪我人が、親父じゃなくおまえになってたってだけだ。

いいから、いつまでもぐだぐだ言っでないで行くぞ」

小次郎の病室は六人用の大部屋であった。

「やあ咲希ちゃん。わざわざ来てくれなくてよかったのに」

ベッドから上体を起こし、小次郎が片手を挙げた。

「寝てください。おじさん」

「いやいや、こんなのなんてこたないんだ。ただの検査入院だし明

日には退院できるんだよ。肋あはらいにひびが入っただけなんだからさ、固

定してりや治る」

「まったくだ。おれも高校んとき肋骨ろっこぶやったが、咳せきすると痛いくら

いで大した問題はなかったぞ。ほっといただけで一週間で治った」

「嘘だあ。頑丈なシロちゃんでも、あときは完治に半月くらいか

かったよ！」

と咲希が突っ込みを入れる。その声を無視して史郎は花瓶を取り

あげ、水を替えに早足で出て行ってしまった。

小次郎が苦笑する。

「どうにも愛想のない息子ですまんね、咲希ちゃん」

「いえ、シロちゃんはああでない」と

その後戻ってきた史郎とともに、咲希は小次郎から披露宴後の

諸々をさわりだけ聞いた。

殴られた数人のうち、新婦の親戚が「訴える」と言って引かない

らしく、どうやら傷害事件に発展しそうだという。

また新婦は結婚後も仕事をつづける予定が、退職の方向で話が進んでいるそうであった。懲戒解雇ちやうかいがいこはさすがに無理だが、やんわりとした退職勧告というやつだ。

「大人は汚い」

「わたしと翔ちゃんの愛を、くだらない常識で縛ろうとしている」などと新婦は中学生のような台詞せりふをのたまひ、親とも会社とも断絶の道を一直線とのことであった。

「『女は男次第』なんて昭和の台詞かと思ってたが、二十一世紀になっても本質は変わらないんだなあ。くれぐれも咲希ちゃんはおかしな男にひっかかるんじゃないよ」

と、しみりとした顔で小次郎は言った。

最後にいま一度頭を下げあって、咲希は史郎と病室へ出た。

白とミントグリーンで統一された、病棟の廊下を歩く。エレベータの前には人だかりができていた。薄くひらいた窓の外では浅葱あさぎいろの空が広がり、山茶花さざんかがあざやかに咲いていた。

突如、空気を高い悲鳴が裂いた。

咲希は思わず立ちどまった。声の方向を追って振りむく。

病室の中から湧いた悲鳴であった。腕に点滴を刺し、鼻に管を入れた女が、ベッドから首をもたげてわめいている。金切り声だ。言

葉はうまく聞きとれないが、その顔に見覚えがあった。

——真夏のガーデンで、昏睡した花嫁だ。

化粧を落としているせいで一見別人だ。しかしメイクにくわしい咲希にはわかる。確か飯田、いや飯塚千絵梨とかいう名前だったよ  
うな。

「シロちゃん、ここで待ってて！」

「え、おい」

咲希は病室に駆けこんだ。

千絵梨の夫がおろおろと妻を制止している。ナースコールの紐が  
垂れ下がって揺れていた。千絵梨がわめきながら、夫の手を跳ねの  
ける。よろめく夫を、咲希は反射的に受けとめた。

瞬間、彼女と咲希の目がまともに合った。

彼女のほうでも咲希の顔に見覚えがあったらしい。はっとした顔  
になると、身をのりだして咲希の腕を掴んできた。咲希は顔をしか  
めた。皮膚に爪が食いこんで痛い。

「め……目が覚めたんですね。よかった、いま看護師さん呼びます  
ね」

となだめる咲希には取りあわず、

「あの子に足をひっかけられたの！ あの子よ、あの子！」  
と千絵梨は叫んだ。

「え、はい？ あの子って？」

「ナオよ、たからだなお宝田奈扇！」

彼女が怒鳴りながら咲希を揺さぶる。

唐突に口に出された「宝田」の姓に咲希は戸惑った。

脳裏をいくつもの顔と名前がよぎる。現経営者の宝田美香子。みかこその元夫である宝田寿行。としゆきそして千絵梨の足もとへ飛んだ、ウエイトレスの白い脚——。

視界の端で、夫がようやくナースコールを押したのが見えた。

「宝田奈扇っていうんですか、あのウエイトレスは？」

「そうよ、なんであんな格好してたか知らないけど、あそこの式場の、経営者の娘！ 高校んときの後輩だもん、間違いない、絶対そう！」

千絵梨は咲希をもぎ離し、

「ああもう、スマホ貸して！」

とじれったそうに叫んだ。

勢いに押され、咲希はバッグから出したスマートフォンを彼女へ手渡した。千絵梨が猛然と操作をはじめめる。どうやら自分のSNSへアクセスしているらしい。

「ほらこの子よ、見て！」

得意げに千絵梨がスマートフォンを手渡すと同時に、看護師たち

が医師を引き連れて病室へ飛びこんできた。夫がほっと安堵あんどの顔になる。

「さつき目が覚めて、急に——」

「飯塚さん、気分は悪くないですか？」

「めまいは？ 吐き気は？」

千絵梨に殺到する白衣の一人から弾き出され、咲希は呆然とスマートフォンスマートフォンの画面を見つめた。

そこには高校の卒業写真らしき画像が映しだされていた。全員が女子生徒だ。卒業証書の筒を持ち、制服姿で泣き笑いを浮かべている。

まぎれもなく、聖北斗学院高校せいほくとの白ブレザーだった。

聖北斗学院高校は県内随一の名門私立であり、名財揃ったいわゆる「いいところの子」しか入れないと評判のカトリック系高校である。

そしてフレームの端に遠慮がちにおさまっているのは、確かに

「名なしのウエイトレス」こと宝田奈扇たわいしと、澤石百合香であった。

6

「ごめんね、送ってもらっちゃって」

カローラアクシオの後部座席で、咲希はバックミラー越しに頭を

下げた。

「いや、コンビニに行くついでだ」

運転席の史郎が短く答える。

ちなみに二人の家から徒歩五分の距離に、セブンイレブンもローソンもある。「車で三十分以上かかる青扇殿の近くまで、わざわざなぜ」と突っ込みたいのを咲希はこらえて、

「それより、やっぱりシロちゃんの言うとおりだったねえ」

と肩を落とした。

——澤石百合香って女を、あまり信用しすぎるな。

そう助言されたことは記憶に新しい。

「ちよつと毒舌だけど、気さくでいい子だと思ってたのになあ。わたしってほんと、人を見る目ない。香耶ちゃんかやに『脳味噌お花畑』って笑われても文句言えないわ」

百合香とウエイトレスが知人関係にあるのは知っていた。だがまさか、ここまで隠し事を重ねられていたとは思わなかった。宝田奈扇とやらの目的はまだ不明だが、百合香が一枚噛んでいることはもはや疑いようもない。

しょぼんとうなだれる咲希に、

「いや、まだそうと決まったわけじゃないけどな」

と史郎は低く言った。

「え？」

「なんでもない。それはそうとして、蔵野くらのって男からなにか連絡はあったか」

「ううん。火曜日に電話があったつきり」

咲希は首を振った。

チェリーブラッサムの蔵野から、

「今週土曜、また青扇殿でお願い。夕の部で、新婦友人役ね。今回のサクラは合路あいじさんだけになっちゃうけど、慣れてきたから大丈夫よね」

と電話があったのは四日前のことだった。

「わたし一人ですか。百合香は？」

「それが断られちゃったのよ。はずせない用事があるんですって、めずらしい」

蔵野は大仰おおむきようにため息をついた。

「あ、服装指定は『新婦より目立たずキメすぎず、適度に可憐かれんで適度に落ち着いた感じ』だそうよ。新郎はゼネコン系建設会社に勤務。新婦はデパートの化粧品売り場のBAやってたけど、寿退社済み。出合いは共通の知人の紹介、つまり合コンね。新婦は高校のとき友人間のトラブルがあったらしくて、それで友達ほとんどを……」

再度、蔵野がため息をつく。



「どうしたんですか」

彼らしくもない様子に、つい咲希は尋ねてしまった。蔵野が答える。

「いえね……。こんなこと合路さん相手に言うのはあれなんだけどさ。今回の話、断ってくれてもいいわよ」

「えっ」

「だってなんだか、いやな予感がするんだもの。澤石さんがいないってのも不安だしさあ。自慢じゃないけどぼくの勘、けっこう当たるのよ」

「いえ、やります」

咲希は決然と答えた。

「青扇殿で夕の部ですよ。一人で大丈夫です、行きます」

「そう？　じゃあ甘えちゃっていいかしら。……ごめんなさいね、この業界にありえない景気の悪いこと言っちゃって。脅かしたお詫わびにボーナス付けとくから、次も張りきって行ってちょうだい」

蔵野が通話を切つてすぐ、咲希はお隣の今居家に走った。部屋でくつろいでいた史郎を急襲し、

「たったいま蔵野さんから連絡があつてね、次回は百合香が来ないんだって。こないだのSNSの画像の件といい、ねえ、どう思う？」

と鼻息荒く詰め寄った。

そうしていま、二人は青扇殿に向かうべく史郎の愛車に乗っている。

史郎は「なぜそこで安易に引き受ける」と咲希を叱ったものの、折り返し電話して断れとは言わなかった。

それどころか前夜は彼からLINEをくれて、「送ってやる」とまですし出てくれた。咲希は狂喜乱舞し、すぐさま液晶画面をスクリーンショットして別フォルダに保存した。

紅葉の季節にさしかかった青扇殿は、目の覚めるような美しさだった。

色づきは八分といったところだろうか。ほむら立つような大紅葉

の赤、小檜の橙、板屋楓の黄。五葉躑躅はまだ葉になかば緑を残

し、同じく色づきが遅かったらしい山法師が、緑とピンクのグラデ

ーションを成している。

背後の山々も見事に紅葉していた。常緑樹の緑と相反する色のはずなのに、不思議と溶け入るように目にやさしい。まさに壮麗たる秋の眺めだ。

「じゃあ、行ってくるね」

「ああ」

「なにかあったら、LINEしていい？」

「おう」

そつげなく答え、史郎はエンジンを踏み込んで離れていった。角を曲がって消えていくアクシオを見送って、咲希は自分の格好を改めて見下ろした。

カシユクールでデコルテを強調した、アコーデイオンプリーツのワンピースだ。色は無難にピンクベージュにしておいた。やや古風なシルエツトながら、ウエストベルトにあしらった薔薇ばらのコサージュが華やかである。

——さて、行くかあ。

両頬を叩いて気合を入れたところだったが、メイク済みなのでやめておく。

代わりに内心で拳を握ると、咲希は颯爽さつそうと正面玄関へ向かって歩きただした。

「えー、新婦の花音かのんさんは、伊藤家の次女として七月二日に飯豊産科クリニックで御誕生されました。飯豊山高校たかっ、高津美容専門学校を御卒業後は、百貨店のビューティアドバイザーとして御活躍され、今年八月をもってめでたく寿退社を……」

そつのない司会がよどみなく語っていく。

とくに問題なさそうな披露宴じゃない、と咲希は新婦友人席から

高砂を見守りつつ思った。

新婦の顔はマリアヴェールに隠されてよく見えないが、おそろく美人だ。新郎はべったりと撫でつけた髪をジェルで固め、鼻髭はなひげと色つきの眼鏡がやや胡散臭い。うさんくさしかし顔立ち自体は整っていた。美男美女の御二人、という美辞麗句がけして浮いていない。

主賓の祝辞も手短に終わった。

「乾杯！」

シャンパングラスを持った手がいつせいに上がる。

つづいてケーキ入刀となった。ファーストバイトに巨大なスプーンを使う定番の演出で、会場からはそれなりに笑いが湧いた。

お色直しでいったん退場した新婦は、たつぷりシフォンとレースをあしらったオーロラピンクのドレスで再登場した。プリンセスラインの、まさに披露宴でしか着られないお姫さまスタイルだ。

新郎はタキシードを着替えこそしなかったものの、胸ポケットのチーフをドレスに合わせて同色のピンクに替えていた。

——うーん、なんてまともな披露宴。

フォアグラのポシェを添えたスープを味わいながら、予想外だわ、と咲希は首をひねった。

壁際に立つ醍醐リカに、ちらと視線を走らせる。

彼女がここにいるということは、彼女がプランナーとして担当し

た披露宴なのだろう。しかしそれにしては無難すぎる。数々の不祥事を鑑かんがみてサブプランナーに降格したとの話だが、順調さがかえって怖い。

身構えつづける咲希をよそに、キャンドルサービスは無事終わった。

司会がマイクに口を近づけて言う。

「一段と華やかな御二人を、あらためてお迎えいたしました。つづきましては新郎御友人様より、お祝いのスピーチを頂戴いたします」紹介された新郎友人が、一礼してマイクスタンドの前に立った。

——あれ？

咲希は『白身魚のオリエンタルロースト』を切り分ける手を止めた。

お祝いのスピーチをしている新郎友人の顔に見覚えがある。以前もどこかの披露宴で見た、男性のサクラだ。ということは新婦友人だけでなく、新郎のほうも水増し要員を頼んでいるらしい。

——蔵野さんの話と違うじゃん。

咲希は目をすがめ、新郎友人から高砂の二人へ視線を流した。じつと目を凝こらす。

——あつ。

思わず声をあげかけたとき、後方の入場口が勢いよくひらいた。

騒がしい靴音とともに、黒い一団が入ってくる。

見るからに柄の悪そうな男たちだ。凶相で、目つきが鋭く、一樣に黒スーツで身を包んでいる。とはいえ慶事用ではない証拠に、白ネクタイの者はいない。

ちんにゆうしや  
闖入者はずかずかと会場を突っ切って進んだ。スピーチをなかばで中断された新郎友人が、口を開けて彼らを見守っている。

新郎が慌て顔で腰を浮かした。新婦が彼を見て「どうしたの」と言いたげな仕草をするのが見えた。

高砂のすぐ前で、黒い一団が立ち止まった。

先頭に立つ男が胴間声どうまこえを張りあげる。

「参列者の皆さん、お騒がせしてまことに申しわけない。わたくしども、本日は新郎の身柄と御祝儀を差し押さえるべく、参上いたしました！」

しわがれてはいるが、よく響く声だった。

会場が静まりかえった。

「この会場でなら確実に新郎が捕まる、ならばにまとまった金があると踏んでのことです。重ね重ねお詫び申し上げます！ しかしもとはといえば、借りた金を返さず、電話に出ず、督促状も無視して逃げまわる新郎くんがよくない」

先頭の男が、語尾に笑いを滲にじませた。

どうやら借金取りらしい、と参列者の頭にもすこしずつ飲みこめていく。話しぶりからして、新郎はたちの悪い不良債務者のようだ。業を煮やした貸金業者が、取立てのため派手なパフォーマンスに打って出たというところか。

——でもここまでするのは、さすがに違法じゃないの？

咲希は啞然あぜんとフォークを持ったまま思った。確か債務者の借金について、周囲に触れまわる行為は法律で禁じられているはずだ。

男がにやつきながら、言葉を継ぐ。

「とまあ新婦のお嬢さんには済まないが、御祝儀はわれわれが差し押さえさせていただきますわ。あとはゆっくり、水いらずで新郎くんとお話してください。新郎くん、御祝儀袋はどこに？」

「あの、式場の、金庫に……」

新郎がへどもどと言う。

「暗証番号はぼくの誕生日で、あの——金庫の場所は、スタッフさんに聞いてもらえれば」

「駄目よー!」

新婦が叫んだ。

「なに考えてるの？ あなた一人のお金じゃないのよ、たったいま皆さんからいただいた御祝儀よ？ それになによ、借金って。そんなことあなた、結婚前に一言も——」

「そうだ、どういふことなんだ、きみ！」

新婦の親族席から罵声ばせいが上がる。数人の中年男が立ちあがり、怒りの形相もあらわに新郎へ指を突きつける。

「借金を隠して結婚だなんて、これは詐欺さぎじゃないか！」

「そうだそうだ、結婚詐欺だ！」

「まあ、詐欺とはなんですか！」

新郎の母らしき女が、新郎と男たちに割って入った。顔が真っ赤だ。

「人聞きの悪い！　うちの子を詐欺師呼ばわりする気！」

「詐欺師で悪けりや、ペテン師だ！　借金はあるわ、嘘つきだわ、

いいとこなしの山師じゃないか！」

「山師ですって！　失礼にもほどがあるわ！」

「失礼はどっちだ、人様の大事な娘を傷ものにしておいて居直る気か！　出るところへ出たっていいんだぞ！」

新郎の母に、新婦親族の男が詰め寄った。

「おい、妻に触るな！」

新郎の父親が慌てて立ちあがる。新婦親族の男の胸を突き飛ばす。

「お、手を出しやがったな！」

「息子が息子なら親も親だな！　おい誰か、警察を呼べ！　暴行罪



だぞ、暴行罪の現行犯だ！」

罵声ばせいが飛び交う。数箇所ばせいで揉み合いがはじまった。

肝心の新郎はといえば、債権者の一団を金庫に案内させようと、おろおろ顔でスタッフにすがりついている。スタッフたちは「それはやめたほうが」と新郎を諫めながら、

「でも警察沙汰にするわけには」

「とりあえず警備員を」

「チーフマネージャーの指示を」

と右往左往している。

「おい、詫びの一言もないのか！ この事態をどうするつもりなんだ！」

新婦親族の中でもっとも声が大きく、血の気が多いらしい中年男が新郎の肩を掴んだ。無理やりに振り向かせ、襟首えりくびを掴む。新郎の顔から血の気が引き、みるみる白くなっていく。

「いやその、あの、ぼ、暴力は」

「言えた立場か！ さつきから見てりゃあ女みたいにへなへなしやがって。おまえ、どう責任をとるつもり——」

「やめて——」

拳を固めた男に、背後から新婦が飛びついた。

無意識のように、男が新婦を振り払った。

新婦の体が大きく泳ぐ。背後へと派手に倒れこむ。

咲希はデジャヴを感じた。

——あのとときと、似ている。

うだるような真夏のガーデンウエディングで、新郎に振り払われてバランスを崩した新婦。メインテーブルへ頭から突っこんでいった光景。割れた陶器。散乱した花。びくりとも動かなくなった新婦。

——飯塚千絵梨が昏睡状態に陥った、あの披露宴と似てる。

しかしあのとときは違い、新婦は意識を失いはしなかった。ただ立てないようで、「脚が、脚が」と呻うめいている。どうやら捻挫ねんざか骨折かしたらしい。

「花音！」

「誰か、救急車！」

新婦の両親らしき悲鳴に、醍醐リカの絶叫が重なる。新郎の母親が怒鳴どなった。

「ああもう、あんたたちみんな、出て行って！ 話はあとで聞きます！」

母親に追い立てられ、債権者たちはにやにやしながら出て行った。しかしダークスーツの一団が消えたところで、事態が收拾するはずもなかった。新郎ははまだ胸倉を掴まれて揺さぶられ、新婦は「脚が」と倒れ伏したままだ。

新郎の親族が声高にわめいた。

「だいたい従業員がおかしいだろ！　なんであんな部外者を会場まで通したんだ！　ちよつと考えりゃわかりそうなもんじやないか！」

「そうだそうだ、これは式場の不手際だ！」

「最近、不祥事の連続らしいじやないか、青扇殿も落ちたもんだな！」  
脚を押さえて倒れたままの新婦も、「そうよ！」と金切り声をあげた。

「打ち合わせのときから、いろいろおかしいと思つてたのよ！　なんなのこの式場！　人の一生に一度の思い出をぶち壊して——絶対許せない！　訴えてやるから！」

咲希の席から、醍醐リカの蒼白な顔（そうはく）が真正面に見えた。

新婦はわめき散らし、新郎は力なくかぶりを振るばかりだ。

「責任者を呼べ！」

「マネージャー？　そんなもんじや話にならん。社長だ、経営者を呼べ。ここへ来て頭を下げるか、訴訟されるか選べと伝えろ！」

いまや新郎親族も新婦親族も、矛先を完全に式場スタッフへと変（は）えてしまっていた。駆けつけたらしい警備員が、どうしていいものかと立ち往生している。数人のスタッフが廊下へ走り出る。

咲希は呆然としていた。

——なんなのよ、この茶番。

床へ横座りになった新婦はマリアヴェールを上げており、いまや顔があらわになっている。新郎も揺さぶられた拍子にか眼鏡がはずれている。

——二人とも、知ってる。

前にも見たサクラ要員だ。

おそらくはどこかの劇団員だろう。蔵野が言う「初々しさ」がなく、堂に入った演技で場に馴染みすぎていたため逆に目立ったのだ。

——巧くメイクしてるけど、わたしの目はごまかせないわ。

咲希が化粧をはじめたのは高校卒業後である。だが遅れを取り戻そうと必死に、かつ持ち前の熱中癖でみっちり学んだおかげで、自慢じゃないがメイク術には人一倍くわしくなった。ノーメイクの千絵梨を一目で見抜けたのだって、その賜物だ。

新郎新婦までサクラということは、つまりこの披露宴自体が架空ということだ。文字通りの茶番狂言である。

——でもいったい誰が、なんのために。

会場の扉が開いて、宝田美香子が駆けこんできた。どうやら従業員のうち誰かが知らせに走ったらしい。狼狽して顔が引き攣っていた。唇が真っ白だ。

咲希はクラッチバッグを探り、スマートフォンを取り出した。

とりあえずここは蔵野の指示を仰いだほうがよさそうだ。電話で

の口ぶりからして、蔵野はこの一件に噛んでいないとみていいだろう。

信用できる男かどうか、いまひとつ判断はつかない。でも百合香がいないいま、蔵野よりほかに頼れる相手がいない。

猿芝居の喧騒を背に、スマートフォンを耳にあてながら咲希は会場を出た。

廊下に出る。ようやく呼び出し音がはっきり聞こえた。

しかしその音を二回と聞かぬうち、咲希はなかなば無意識に通話を切っていた。

廊下の向こうに、白い横顔が見えたからだ。

ウエイトレス姿の宝田奈扇であった。

「ちよ、待っ………!」

思わず声が出た。

奈扇が肩越しに振りかえる。しまった、と言いたげに眉根を寄せ、さびすを返して駆け去っていく。

選択肢はなかった。咲希は奈扇を追って走った。

咲希は叫んだ。

薄暗い階段を、奈扇がつんのめるように駆けおりにいく。

ああもう、なんで差が縮まらないの。咲希は舌打ちした。わたし、もつと足が速いはずなのに。そりゃ障害物競争は苦手な直線コースのほうが得意だったけど、でもそこらの女の子よりよっぽど速い自信が――。

そこまで考え、はたと気づいた。

――そうだ、ヒール。

宝田奈扇はぺたんこの靴だが、こちら八センチのピンヒールだ。咲希はためらいなくパンプスを脱ぎ捨てた。自分がぐんと加速するのがわかった。

宝田奈扇にもそれが伝わったらしい。「ひっ」とちいさな悲鳴まで聞こえる。

奈扇が突き当たりの重たそうな扉を押し開け、その向こうへすべりこむ。彼女を追い、咲希も扉のノブへ手をかけた。握って、思いきり引く。

扉の向こうには灰色のコンクリートで固めた景色があった。ざっと見ただけでも、百数十台の車が整然と居並んでいる。

――地下駐車場だ。

そう認識した次の瞬間、咲希は後ろから利き腕を掴まれた。

咄嗟に体をひねり、相手の顔を見る。ダークスーツに興味の悪いネクタイ。頬の傷のへこみが目立つ。

さつき見たばかりの借金取り立て屋の一人だ——いや、一人じゃない。

四人いる。

咲希の肌がぞっと総毛立った。

首を曲げると、走る宝田奈扇の背中が遠くなりかけていた。舌打ちし、左手でクラッチバッグを探る。利き腕を掴まれた不安定な姿勢から、思いきり振りかぶる。

奈扇が「ぎゃ」と叫んだのがかすかに聞こえた。

投げつけたのは香水のミニボトルだ。イヴ・サンローランのベビードール・オーデトワレ。男受けのいい香水としてどの雑誌にも載っている、定番中の定番である。

「てめえっ」

男の一人が、咲希の空いた腕を押さえようとしてきた。その鼻先へ左掌を突きだす。男が反射的に動きを止めたのを見はからい、狙いすまして股間こかんを蹴りあげた。

声にならぬ声をあげ、男がその場へ両膝を突く。悶絶もんぜつしていた。

口の端から泡を噴き、白目を剥むいている。

残る二人の男が、あきらかに怯ひるむのがわかった。

「この女、なんて残酷な——」

「この容赦ようしやのなさ、ただもんじゃねえぞ」

しかしここまでだった。

さすがに三人がかりでは咲希も反撃のしようがない。一人倒せただけでも充分かと、力を抜いて拘束こうそくされるがままにまかせた。

宝田奈扇が駐車場を突っ切って走り、重い扉の向こうへ消えていく。歯噛みする咲希を無視し、男たちは小声でささやき合った。

「おい、この女やべえな。どうするよ」

「女？ いやニューハーフだろこれ、肩から腕にかけての感触が女じゃねえ」

「うわほんとだ、なんだこの筋肉」

「悪かったわね！」

咲希は怒鳴った。嫁入り前の娘に対し、なんと無礼なコメントか。人がおとなしくしてやってるからって、調子にのりすぎではないのか。

ああ、こんなことなら負けたとしても、洩れなく全員の股間を狙い、男としての人生を終わらせてやるべきだった——。とほぞを噛む咲希の耳に、車のドアの開閉音が届いた。

数秒後、咲希は目を剥いた。

眼前で、黒服の男が体ごとききれいに一回転していた。



つづいて、もう一人。肩を拘束していた男の手が離れたかと思うと、再度もう一人。

ほんの一分足らずのうちに、三人の男はコンクリートの床で昏倒こんとうしていた。

そしてその横へ悠然と立つその姿は。

「シ……」

——シロちゃん。

咲希は両手を胸の前で組み、立ちすくんだ。

眼前にいるのはまぎれもなく、咲希の幼少時からの想い人である

今居史郎その人であった。

相変わらずの長身で、ちょっと猫背で、約二十センチの高みから

無造作に咲希を見おろしている。

「シロちゃん、どうして……」

「いやおまえ、帰りの足がないだろう。まだ読んでないヤンマガが  
ちようど車に積みっぱなしだったんで、目を通しがてら待ってたん  
だ」

「でもいつの間に、合気道なんて」

「サークルで習ってるからな」

「え！ バレーサークルじゃなかったの？」

頓狂とんきやうな声をあげた咲希に、

「言っただろ。＃バレー以外でもやりたいことがある＃」って

と史郎は答えた。

咲希は両目をハート形にし、陶然とうぜんと彼を見上げた。やっぱりわたしのシロちゃんは、世界一素敵だ。ああもう、いますぐ結婚して欲しい。もはや土下座して懇願するレベルと言っても過言でない。

だが咲希はいったん我にかえった。

「あ、でもこれって過剰防衛にならないの？ 有段者が喧嘩すると、凶器と見なされて傷害罪で起訴されやすいってよく聞くけど」

「心配するな。有段者でもなけりや黒帯でもない、ただのサークル活動だ」

「そっか、なら安心。——って、そうだ！ 宝田奈扇！」

咲希は叫んだ。

「シロちゃん、わたし、例の名なしのウエイトレスを追ってたところだったの！ 背中に香水のボトルぶつけてやったから、きつとすごい匂いのはず！ いますぐベビードールの香りを追っかけよう！」

ベビードール・オーデトワレをかぶった宝田奈扇は、カラーボールの塗料で染まった強盗並みに容易に追撃できた。

さすがにエレベータを使われたらお手上げだったが、階段からエレベータまではだいぶ距離がある。追う咲希を警戒してか、彼女は

階段で上階へ逃げることを選んだらしい。

「いた！ シロちゃん、あそこ！」

角を曲がっていく奈扇の背中を、咲希は指さした。パンプスなし、ストッキングのみの足で疾走する。

奈扇は追われてパニック状態なのか、突き当たりの大広間へと逃げこんだ。ついさつき、咲希自身がいた披露宴会場だ。

咲希も史郎とともに大広間へ飛びこみ、即座に足を止めた。

そこにいたのは宝田美香子と、元夫の寿行であった。

すでに客は誰も残っていない。新郎新婦もだ。なかばまで食べ散らかされたコース料理や、ワインが入ったグラスもそのままに、元夫婦の二人だけを残して森閑しんかんとしている。

取り立て屋たちもない、と咲希は首をめぐらせてから、

——あれ、そういえばわたし、なんであの取り立て屋たちに襲われたんだっけ。

とようやく疑念を抱いた。

ええと、さっきの披露宴が全部お芝居だったとしたら、つまりあの債権者たちも役者だったわけで。奈扇を追うわたしを止めようとしてたつてことは、彼らと奈扇はグルなわけで。

すっかり麻痺まひした頭を回転させはじめ。しかしその思考を裂くように、

「奈扇ちゃん！」

と叫んだのは美香子だった。

「奈扇ちゃん、どうしてここに？ その格好はなに？ その人たちは？」

矢継ぎ早に問われ、ウエイトレス姿の奈扇が棒立ちになる。どうやら母子が顔を合わせるの計算外だったらしい。

美香子の正面にいた寿行が「まずい」と言いたげに顔をしかめた。

奈扇の顔も、実父の寿行とそっくりに歪ゆがんだ。彼女はその場でたたらを踏み、きびすを返そうとして、史郎に行く手をふさがれた。

奈扇は美香子を見やり、寿行に目を移した。

所在ない様子で両親を見比べる。長い沈黙が落ちた。

「あの、ママ……」

ためらいがちに、奈扇が口をひらいた。

「やめなさい」

寿行がびしりと言った。

「ここはパパにまかせておくんだ。奈扇のためにならないことはない。約束するから、よけいなことは——」

「なんのこと？」

美香子は顔を引き攣らせて、元夫を振りかえった。

「いったいなんなのよ。あなた、わたしに隠れて奈扇ちゃんと連絡

を取りあつてたの？ まさか忘れたわけじゃないでしょうね、この子の親権を取つたのはわたしよ。そのわたしの許可もなく、勝手なことをしないで」

「ごめんなさい、ママ」

奈扇の絶叫がさえぎった。

「——ごめんなさい」

「奈扇」

寿行の制止を無視して、奈扇は声を高めた。

「全部わたしと。パパの仕込みだったの、最近つづいた不祥事もトラブルも。ううん、正確には全部じゃないけど、トラブルが起きやすいように、醍醐さんに面倒そうなカップルを担当させたり、控室の鍵をわざと開けておいたり、部外者が中に入りやすいよう細工しておいたのは、わたしたちなの」

美香子の口がぼかんと開いた。

その頬が見る間に血の気を失い、白くなっていく。

「どうして」

美香子は喘ぐあえように言った。

「なぜ、奈扇ちゃんが、どうしてそんな——」

「おまえには経営なぞ向いていないと、わからせたかったからだよ」  
寿行が苦虫を噛みつぶした顔で言う。

「多少つらい目に遭わせてやりやあ、お嬢様育ちのおまえはすぐ音をあげるだろうと踏んだんだ。白旗を上げたらすぐ奈扇に誘導させて、おれに泣きつくよう仕向けるつもりだった。あのな、美香子。

この『青扇殿』は奈扇にとって、厄介なお荷物でしかないんだよ」  
噛んで含めるように彼は告げた。

「おまえお得意の『娘にここで挙式してもらうのが夢なの』が、奈扇にとってどれほどプレッシャーだったかわかるか？ お嬢様の純粋な厚意とやらが、ときにどれだけ人を傷つけるか、その歳になってもおまえはまったくわかつちやいない。おまえが奈扇を可愛がっているのは否定しないさ。だがな、おまえのそれはしよせん——」

「やめて、パパ」

奈扇は彼を止めた。

彼女は血のつながらぬ養母に向きなおり、観念したように言った。

「ごめんなさい、ママ。こうなったらもう、全部正直に言うね」

「おい、奈扇」

「パパは黙ってて。……わたしとパパは、この青扇殿をなくしてしまいたかったの。パパは結婚産業なんてもう斜陽だと考えてる。ここを壊して、高層マンションに建て替える予定なのよ。そのために、まずマンションが建つ建つって風聞を流して、映画の景色がどうとかって、先に評判にさせて……」

「え？　もしかしてそれ、映画の『ラスト・サイレント』ごっこができるって噂のマンション？」

咲希が声をあげる。奈扇はうなずいて、

「あなた、合路さんよね。あなたのこと巻きこんじゃって、ごめんなさい」

と頭をさげた。

反射的に咲希は「え、あ、いえそんな」と手を振った。一拍置いてはたと気づき、問いかえず。

「なんでわたしの苗字を知ってるの」

「ユリから聞いたから。……もうわかってるんでしょう。わたしとユリが友達だって」

「ああ……」

ユリとは当然、澤石百合香のことだろう。

奈扇は眉宇を曇らせて、

「例の化粧室にまつわる噂を再燃させて、大げさに広めなおしたのもパパとわたし。青扇殿の悪評のひとつにしたかったのと、わたしが、その——あそこを、ウエイトレスの制服に着替える更衣室代わりにしていたから。だからなるべく、人が寄りつかない場所にしておきかったの」

「ええと……じゃあ、あの化粧室にいと気分が悪くなったのはな

ぜ？ やっぱりモスキート音アプリ？」咲希が問う。

「よくわかったわね」

奈扇は目を見ひらいた。

「でもアプリを使ったのは、わたしじゃなくユリのアイディアよ。あなたがしょっちゅうあの化粧室を使いに来るって愚痴ぐちったら、案を出してくれたの」

「うわ、百合香のやつ……」

咲希は天井を仰いだ。

なに食わぬ顔して、あいつめ。まあ百合香らしいと言や百合香らしいけどさ。

「あ、そうだ！ 飯塚千絵梨さんのことは？」

咲希は気を取りなおして尋ねた。

「いくら顔を見られたからって、転ばせて昏睡状態にさせるのはやりすぎじゃない？ 彼女があのままずっと目覚めなかったら、どうする気だったのよ」

「だって、あんな大ごとになると思わなかったんだもの」

奈扇が悲鳴じみた声を放った。

「ただ転ばせて、逃げる時間を稼くごうと思っただけ。入院するほど頭を打つなんて誤算だったのよ。そりやちよつと困った人ではあるけど、べつに嫌いな先輩じゃないし」



「じゃあ醍醐リカさんは？ 彼女も青扇殿を潰したうちの一人なの」

「いえ、違うわ」

奈扇は肩を落とした。

「……彼女は天然。もとからああいう人よ。有名なトラブルメーカーだから、あえて担当件数を増やして野放しにしておいたつだけ。父の縁故で入ったつてことにして、鹹首くびにしにくいようにして」

「なんでそこまでして、青扇殿を潰したいんだ」

史郎が口をはさんだ。

「親父さんは結婚産業に未来はないとみて、マンションに建て替えたがつている。それはわからんでもない。でもあんたはなぜ、世話になった養母を裏切つてまで、青扇殿をなくしたがつてるんだ」

「奈扇」

寿行が「言わなくていい」と言いたげに首を振る。

しかし、数秒の絶句ののち奈扇は顔をあげた。

美香子を振りかえり、決然と言う。

「ごめんなさい、ママ。——わたし、あのポスターの『お母さんも、ここで挙げました。そして私も』つていうコピーが、ずっと重荷だった」

「奈扇ちゃん……」

美香子が呆然とつぶやく。奈扇が顔をくしゃっと歪める。

「パパにね、この計画を持ちかけられたとき——ママに申しわけないと思いつながら、心のどこかでほっとしてた。だってあのコピーって、老舗の歴史を誇る意味より、ママの願望のほうが大きいでしょう。それがよくわかってたから、期待を裏切るのが後ろめたくて、ずっと怖かった」

奈扇は涙を啜った。

「ママに負債を負わせるとか、責任を押しつけるとか、そんなつもりはなかったの。最初はただ、パパに経営権が戻るだけって話だったし——そうなれば、その」

「その、なに？」

「パパは——わたしに結婚しろとごり押しはしない。匂わせることもしないって、約束してくれたから」

唇を噛む娘のそばへ、つと寿行が寄り添った。

「くだらん捌め手ばかり使ったのは謝るよ。マンションについての噂を先行させたり、披露宴を装った小芝居を打ったりね。早く潰してしまいたくて、わざとときみを心理的に揺さぶったんだ」

「ママが飯塚さんの一件を気に病んでるのは知ってたわ。だから……パパが、似たような事件をもう一度再現しようって。ママは気が強いけど、根はもろいから、きっとこれで経営権をパパに返して

くるだろう、って」

「すまん、美香子」

寿行が殊勝に謝った。

「だが奈扇は不安定な職業だし、心配だったんだ。おれたちはもう若くない。この子のために、すこしでも確かな財産を残してやりたい」

「不安定な職業、ですって」

美香子が蒼白な顔で反論する。

「なにを言ってるの。奈扇ちゃんはしっかりした会社の正社員よ。」

東証二部の会社に、新卒で総合職として入社——」

「ごめんなさいママ、じつは二年も前に退職しているの」

奈扇はそう言っとうつぶした。

「実の娘じゃないのに可愛がってくれて、ほんとうに感謝してる。わたしもママが大好きよ。でも、わたしの意志だって尊重して欲しいのよ」

彼女は胸の前で両手を組みあわせた。その手を切なそうに揉み絞り、深ぶかと首を垂れる。

「青扇殿で挙式できなくて、ごめんなさい。ママの望むとおりの、完璧な娘になれなくてごめんなさい」

涙声だった。美香子が詰め寄る。

「どうということなの、奈扇ちゃん」

「わたし、ずっと好きな人がいるの。でも」

「でも、なに？」

養母の問いに、奈扇の視線が泳ぐ。しかし彼女は頬を引き締め、意を決したように告げた。

「——相手は、男の人じゃないの」

沈黙が落ちた。

なんとも言えぬ間が長く長くつづく。しかしその静寂を、扉がひらく派手な音が破った。

「ああもう、勝手にぺらぺらしゃべっちゃって。台無しじゃない」  
呆れ顔で入ってきたのは澤石百合香であった。

——え。ということとは。

咲希は奈扇と百合香を交互に見比べた。

結婚願望はないと繰り返かえし言っていた百合香。写真でもわかった二人の親密さ。では奈扇の同性の恋人とは、まさか。

だが百合香の背後から、つづいて入ってくる人影があった。

今度こそ咲希は、あつと声をあげた。

すらりとした長身。うなじで短く切りそろえた髪。パンツスーツがよく似合う細身に、しなやかな長い手足。

——二階堂先輩にかいどうそっくり。

ながせなぎ  
永瀬風描く漫画『恋愛の神様』の登場人物、聖アンセルムス女学院の“光る君”こと二階堂ひかる先輩である。なぜか登場時点からずっと男装しており、周囲もそれを受け入れているという不自然な設定だが、作品独特の世界観で読者には許容されている。ヒロインが恋い焦がれる相手であり、作中の事実上のヒーローでもある。その二階堂先輩を具現化したとしか思えぬ、マニッシュな麗人がいま咲希の眼前に立っていた。

——ああ、そういえば聖北斗学院も女子高だったっけ。

咲希はいまさらながら内心でうなずいた。

麗人に走り寄った奈扇が、美香子に向かって言う。

「ごめんねママ。わたしいま、ほんとうは漫画を描いてるの。二年前にデビューして、マイナー誌で隔月だけど連載も持ってるの」

啞然と咲希が口を挟む。

「あの、ということはあなた、ひよっとして永瀬風？」

奈扇はうなずいた。

「……志信しのぶは、わたしの高校時代からのパートナーなんです」

どうやら二階堂先輩もどきは志信というらしい。まあ素敵なお名前、似合ってる、と咲希は場違いなことに感心した。

志信に肩を抱かれながら奈扇は目を潤うるませ、

「子供の頃から、漫画家になるのが夢だった。ママには言えなくて、

いつも隠れて描いてたの。社会人になってからも、どうしても諦めきれなかった。だから駄目もとで、志信をモデルにした短編を応募したら、運よく新人賞の奨励賞にひっかって——」

「すごいじゃない」

咲希は呆けた相槌を打った。

「ええ。奨励賞だけど、休載の穴埋めで雑誌に掲載してもらえたの。そしたら二階堂先輩のキャラが好評で、アンケートで三位だったのよ。そこからはとんとん拍子で、ついに連載まで。それもこれも全部、志信のおかげよ。彼女はわたしの恋人で、幸運の女神でもあるの」

志信にしがみつくようにして、奈扇が啜り泣きはじめた。

寿行が静かに言う。

「わかっただろう、美香子。娘の晴れの日のために青扇殿を存続させていきたいというのは、単なるおまえの独りよがりだったんだ」

美香子は言葉もなく放心している。寿行がつづけた。

「永久就職なんて言葉もとつくに死語だ。奈扇を見る。もう男女が結ばれることで、安定した生活を得るなんて時代じゃないんだ。わが子が長年の夢をかなえたからには、応援してやろうじゃないか。確かに人気商売は不安定で心配だ。しかし親のおれたちがすべきは、反対や邪魔じゃない。もしものときを考えて、この子に長期運用で

きる資産を遺<sup>のこ</sup>しておいてやることだ。そうだろう？」

つまりその資産とやらがマンションらしい。

寿行の語気に、美香子が一步退いた。

「でも、……」

「おまえの気持ちはわかるよ。お祖父<sup>じい</sup>さんから受け継いだ、大事な会館だものな。だが未来を見ようじゃないか。おまえだって心の底じゃわかってるんだろう。奈扇<sup>なせん</sup>のことがなくとも、地味婚流行<sup>ぼや</sup>りの現代じゃ結婚産業なんて斜陽になる一方だ。先がないよ」

——先がないよ。

その台詞に、咲希はかちんと来た。

「ちよつと待つて。待ちなさいよ」

茫然<sup>ぼうぜん</sup>自失<sup>じしつ</sup>している美香子を後目<sup>しりめ</sup>に、割<sup>き</sup>つて入る。

わけ知り顔で演説をつづける寿行の鼻先へ、咲希は指を突きつけた。

「あんたら親子の事情はどうでもいいわ。でもいまのは聞き捨てならない。撤回<sup>せつたい</sup>してよ」

「なんだきみは、さつきから」

寿行は目を白黒させた。

「ユリちゃんのお友達らしいが、あまり内輪の話に首を——」

「だから親子の事情はどうでもいいったら！ それより長年青扇殿

を経営してたくせに、言うことはそれだけ？ 『地味婚流行りの現代じゃ、結婚産業なんて斜陽になる一方』？ それだけなの？」

「おい、咲希」

史郎が苦い顔で止める。それを振りきって、

「あのねえ、この世にはまだまだ、結婚と結婚式に夢をみてる女が山ほどいるのよ！」

と咲希は怒鳴った。

「確かにバブルが弾けて以降、ブライダル業界の収益は右肩下がりかもしれないわよ。けど今までの経営スタイルが通用しないってのと、結婚それ自体を時代遅れ扱いするのはぜんぜん別の話でしょうが！」

サクラのバイトをはじめて以来、いろいろな人を見てきた。

姑しゅうとめ と夫に泣かされる妻。嫁さえ来ればと見果てぬ夢を見る男。

逆に男を振りまわしてはばからない女。親の言いなりの新郎。己の幻影だけを追っている新婦。

——けれど、どれも個人の問題でしかない。

結婚という制度そのものへの否定にはなりえない。

耳の奥に百合香の声がよみがえる。

——全員が「結婚できなかった」女とは限らないもの。選択の上で「結婚しない」女だって、きつと相当数いたんだからさ。



——幸せになりたいなら思考停止しちゃ駄目よ。その都度ちゃんと、自分の意志でもって選択していくのが大事。

「古い女だと思う？ でも結婚願望が強いイコール旧態依然な女じゃないわ。過去の遺物と否定すべきは、女が生きていくために結婚するしかなかった、女に選択肢がなかった時代とその頃の価値観よ。わたしは現代の女なの。自分の意志で、いろんな選択肢の中から『好きな人と結婚する。素敵な式を挙げる』って道を選んだの！」

啞然とするばかりの寿行に、咲希は追い討ちをかけた。

「世の中にはこういう女だってまだまだいるんですからね。あなた、経営者の器じゃないわ。第一にユーザーの需要を読めてない！ リサーチ不足！ 分析力も皆無！」

咲希は高らかに叫んだ。

「わたしの夢はいままでもこれから、世界一可愛いお嫁さんになることよ！」

## ヒロローグ

秋が終わり、冬を過ぎ、ようやく梅の蕾つぼみがほころびはじめた頃。その結婚披露宴は華やかに、かつ賑にぎやかに執りおこなわれた。

咲希は新婦友人席のテーブルに着いていた。光沢があるオーシャンブルーの、ホルターネックドレスはこの披露宴用に買った新作である。

同じテーブルの右隣では、相変わらず澤石百合香が高価なシャンパンを水のように干している。ウエストから裾にかけて、たつぷりタックドレープの入ったドレスは日本人には難しいパリスピンクだ。しかし色白の百合香にはよく映はえていた。

「そういえば咲希、『恋愛の神様』の最新刊読んだ？」

「読んだ。けど、次で最終巻なのよねえ、寂しくなっちゃう」

「うん。でももう次の連載決まってるらしいから大丈夫よ。クロスオーバー的にお馴染みのキャラも出していく予定らしいから、期待しといて」

「うん、しとく。……けど永瀬凧も、これで家庭ができて安定しち

やうわけでしょ？ 微妙に作風が変わったりしないかしら」

そう言って、咲希は高砂の新郎新婦を見やった。

メインテーブルでは輝くばかりに美しい奈扇が、新郎の志信と腕を組んで笑顔を振りまいている。

奈扇は可憐なパフスリーブにエンパイアラインのドレス。志信はシルバーグレイのタキシードである。

咲希は目を細め、思わずうっとりした。

「志信さん、ほんつと素敵……」

「ああいう格好させたら、ある意味本物の男より様になるわよね」と百合香が四杯目のシャンパンを呷った。

ちなみに主賓の挨拶ならびに乾杯の音頭は、『恋愛の神様』を連載していた雑誌の編集長がつとめた。来賓にも雑誌とコミックスそれぞれの担当編集者と、同業の漫画家数名が招かれているようだ。

宝田美香子と奈扇は、あれからすぐに和解できたらしい。

美香子は涙ながらに

「法律上はなさぬ仲だと、お互い気を遣いすぎたのかしらね。それにしても漫画家デビューだなんて……。奈扇ちゃんたら、早く言ってくればよかったのに。知ってたら、ママのポケットマネーで五万部くらい買ってあげましたよ」

「ありがとう、ママ。でもそこまでしてくれなくていいから。カミ

ングアウトできたことのほうが、ずっとよかった。これからはママがマンションに来るたび、ペンタブやスキヤナを隠す努力をしなくて済むわ」

入籍はできないにしろ、奈扇と志信に披露宴を挙げるよう勧めたのも美香子だという。

「美香子ママ、隠してたけどじつは宝塚とか好きなのよね」

百合香がささやいてきた。

「三十代の頃、男役スターに入れこんで二千万ほど貢いだことがあるとかないとか」

「に、二千万……」

そりやまた豪快な、と咲希は息を呑んだ。

余談だがこの老舗会館『青扇殿』がマンションになるという話は、めでたく立ち消えとなったらしい。あの宝田寿行が咲希の啖呵たんかに感心し、

「いまだきあんなに結婚に焦った必死な女がいるとは」

「ブライダル業界もまだいけるかも」

と認識を改めたがゆえという。

とはいえ老獪ろうかいな経営者である寿行が一発で自分に恐れ入ったとは思えないから、どこまで本音かは正直疑わしい。しかし青扇殿が存続するのだけは確かなようだ。娘の晴れ姿にでれつと目尻を下げて

いる様子からして、なんだかんだ言っても彼も美香子に負けず劣らず花嫁姿を楽しみにしていたに違いない。

必死で悪かったわね——と咲希は苦にがしく思う反面、ほっとしていた。なにはともあれ、これで「いつか青扇殿で挙式する」という自分の夢も消えずに済んだわけだ。結果よければすべてよしである。

——友達の家なんて地位も名誉も財産もある名家同士の結婚だったけど、結局は夫の度重なる浮気で泥沼離婚しちゃったもん。

以前に聞いた百合香のこの台詞は、どうやら美香子と寿行夫婦のことだったらしい。

寿行は失礼で尊大な男で、しかも浮気性ではある。しかし内実は娘第一で動いていたあたり、まったくの悪人ではなさそうだ。だからこそ奈扇も彼を信じて計画に加担したのだろう……たぶん。

——親子も夫婦も、諍いさかいはちよっとしたボタンの掛け違いなんだなあ。

と咲希が内心でつぶやいたとき、横からすっと細い腕が伸びてきた。

「失礼します。お酌してもよろしいかしら」

白い手がワインのボトルを掴む。柔らかな声が降ってくる。

咲希は顔をあげた。

どこかで見たような、四十代なかばの女性であった。きりりとしたショートカットに、ごついメンズの腕時計とパンツスーツがよく似合って――。

そうだ。タウン誌『月刊シテイスケープ』のインタビューだ。うろ覚えだが、関谷さんせきやとか言ったような。

「はじめまして。合路さんでいらっしやいますよね？ わたくし関谷と申しまして、志信の伯母にあたります」

「えっ、ああ。どうも、はじめまして」

咲希はへどもどと頭を下げた。関谷がまぶたを伏せて、

「じつは合路さんにお詫びしなくてはならないことがあります」

「へ？ はい、なんででしょう」

「化粧室の一件で怖がらせてしまったでしょう。あそこにまつわる噂を利用すると、奈扇ちゃんたちをそそのかしたのはわたしなの」

咲希は目をしばたいた。

関谷がいたずらっぽく笑って、声をひそめる。

「大きな声じゃ言えませんがね。あそこで二十五年前、手首を切って首を吊った元花嫁っていうのも、このわたし」

「えっ」

驚いて咲希は身を引いた。

関谷が腕時計をわずかにずらす。手首に見えた白く長い古傷に、

咲希は目を見ひらいた。

「でもあの、その、亡くなったって」

「それはデマ。無理やり結婚させられそうになって、自殺をはかったところまでが実際の話。でもそれ以後は『傷もの』扱いになったから、親にお見合いひとつさせられずに済んで助かりましたわ」

といたって明るく関谷が笑う。

「おかげで現在も気楽なシングルってやつです。あれがきっかけで、はからずもあなたの言う『現代の多様な選択肢』を甘受できることになったんだから、やっぱり強い意思表示って大事ですわね」

「はあ」咲希は腑抜けた相槌を打った。

「だいたい志信がマニッシュな格好するようになったのだって、もとはといえばわたしの真似なんです。おかげで責任感じちやっつてね。奈扇ちゃんたちにも味方せざるを得なかったの」

と関谷は微笑んで、

「青扇殿で長年、怪談扱いにされてるとは知ってましたの。だからまあ、ちよつとした意趣返しも兼ねてです。もちろん、もとはといえば会場に迷惑かけたのはこちらですし、幽霊に仕立てあげられても抗議できる立場じゃありませんよ。だからデマに対する皮肉として、ほんのちよつぴりだけ」

「え——あ、でも」

気を取りなおし、咲希は慌てて言った。

「美香子さんとティーラウンジでお話ししたときは、ええと、本気で驚いていらしたような」

「あらよくご存じで。そうねえ、あのときは鎌かまをかけられてるのかと一瞬焦ったわ。まさか美香子さんから話題に持ちだしてくるとは思わなくて。でもよく考えたら、美香子さんって腹芸ができるタイプじゃありませんものね」

お会いできてよかった、ではごゆっくり——と一礼し、関谷は笑顔で去っていった。

その背中を、咲希はため息まじりに見送った。

左隣へ、ふつと影がさす。

「あ、シロちゃんおかえり」

「おう」

戻ってきたのは、来賓席のもとへ酌に赴いていた史郎であった。

好評連載中『テツ・オオムラの実践合気道講座』の初代担当だった編集者もこの宴に出席しているのだ。ただしいまは出版社を移り、少女漫画畑で活躍中だという。

拍手が起こった。

咲希は目をあげた。メインテーブルに、遅ればせながらのウエディングケーキが運ばれてくる場所であった。



ナイフを手にした奈扇と志信が、出席者に目くばせして手まねきする。美香子、寿行、そして志信の母親と関谷が高砂へ駆けつけ、新郎新婦に寄り添うようにして六人でケーキに入刀した。

わつと歓声が湧いた。

「いいなあ」

咲希は口をあけてつぶやいた。

「あの演出、いいな。わたしのときもやりたい」

「すりやいいだろ」

牛フィレ肉を切り分けながら史郎が気のない声で言う。

「すりやいいだろって、シロちゃん、簡単に言うけどさあ」

「式と披露宴くらいおまえの好きにさせてやる。そのために貯金もしてるしな。でも真冬のガーデンウエディングだけはやめろよ。おれは肩をやっちゃまってるせいで、寒さに弱いんだ」

「え……」

ぼかんとして咲希はすぐ横の史郎を見つめた。

——シロちゃん、それどういう意味。

つまり新郎としてわたしの隣に立ってくれるってこと？ まさか招待客の立場ってオチじゃないよね？ 貯金って？ わたし、都合のいいように受け取っちゃうけどいいの？ ねえちよつと、こつち見てもう一回——。

「皆様、新郎新婦に盛大な拍手をお願いいたします！」  
司会のバリトンが会場に響きわたった。

〈了〉